

「教会の助け方」

詩篇
ヨハネによる福音書

第145篇 14節～16節
第6章 1節～15節

説教 本庄 侑子 伝道師

ある時、主イエスの周りに「病人たちになさっていたしるしを見た」（2節）人々が押し寄せていました。主イエスは弟子たちと一緒に山の上に座り、群衆をご覧になり、弟子の一人ピリポにお尋ねになりました。「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか。」（5節）ピリポは、主イエスの問いかけによって、お腹をすかせた群衆の存在と、彼らを助けようとしておられる主イエスの思いに気づかされました。

ピリポはおおよそその人数を数えて、どれだけのパンが必要か計算し、7ヶ月分の賃金をつぎ込んで足りないだろうと現実的な判断をくだします。アンデレは頭の中で計算するにとどまらず、群衆の中を歩きまわり、パンとさかなを持っている子供を見つけました。しかし、見つけたのはパン5つとさかな2ひきでしかなく、すっかり諦めていました。

しかしこの時、主イエスは群衆を満たすパンの量ではなく、「どこから」とパンの出どころを問うておられました。主イエスは、群衆一人ひとりかどのような飢えを覚えているのか、何に悩んでいるのか、どんな思いで後を追ってきたのかをよくご存知であり、それらは地上のものでは満たせないこと、「天から下ってきた生きたパン」（51節）、主イエスご自身でしか満たせないことをよくご存知でした。

主イエスは弟子たちに、出エジプトの記憶をたぐるようにして、ご自身が誰であるかをお示しになりました。私はあの時、神の裁きを過ぎ越させた“小羊”として、あの時、山の上で授けられた“言葉”として、あの時、荒れ野の旅を支えた“天からのマナ”としてここにいるのだ、と。主イエスは、彼らの飢えを、ご自身の死によってもたらされる永遠の命で満たすために来られました。永遠の命は不死の肉体ではありません。絶対になくならない関係、天におられる神との関係です。

先週、病院のチャプレンの方の講演をお聴きしました。治る見込みのない病を得て、「私の人生は何だったのだろうか？」という深刻な問いが生まれる中で主イエスと出会い、永遠の命に満たされた方々の話でした。その方々は、病を得るまでは自分の願いや理想があって、それがかなうことが幸せだと思ってこられたそうです。

しかし病を得て、神の真実に触れられ、自分の願いや理想が相対化され、絶対的な神の中にある自分自身や自分の人生を見ることができるようになったといます。神が、命がけてこの私を、私の人生全体を肯定してくださった。だから、たとえ自分の思う通りにならなくても、生きづらさや病気、老いや死でさえも肯定できるようになった。病が治らなくてもいい。私は今、本当に幸せだから。そう心から言えるようになったというのです。

神が私の命も人生も握っていてくださる。生も死も神の手の中にある。私たちはそれを知り、それを可能にするために十字架で死んでくださった主イエスを受け取るだけで十分に満たされ、生きていける、そして死んでいけるのです。

あの時、飢える群衆を前にしたピリポやアンデレがたじろいだのは正しかったのです。群衆を助けることができたのは主イエスのみでした。しかしまた一方で、主イエスはわざわざピリポに声をかけ、アンデレが見つけた「子ども」や地上の食べ物、群衆の中にあつたものを受け取ってしるしをお見せになりました。私たちは命のパンを造り出すことはできません。持てるものもわずかです。しかし、持てるわずかなものを差し出すことはできるのです。それらを主イエスに差し出す時、主が私たちの小さい業を受け取って、飢える人に主イエスへの信仰を与え、洗礼へと導き、食卓につかせ、命のパンであるご自身を分け与えて、あふれんばかりの祝福で満たしてください。主イエスを信じる小さき者を主は待っておられます。

さまざまな期待を抱く人々が、今も続々と主イエスの所に押し寄せています。私たちの身近にもいることでしょう。主は、その人々を見ながら私たちに語りかけてくださいます。主イエスなどいないかのようにして動いている日本社会の中で、あなたがわたしに従って毎週礼拝に集い、今日まで歩んできたのは何のためなのか。私があなたを用いたいからではないか。主は、私たちにもお見せ下さるでしょう。私たちの心に浮かぶ誰かが永遠の命に満たされて、『自分の願いがかなわなくてもいい。私は今、本当に幸せです。』そう語りだす姿を。

（記 本庄侑子）